

## チルチル、ごめんね。

もう、40年も前の話なんだけどね、「チルチル」という名の犬がいたんだ。おじいちゃんにとっても忘れられない犬でね、不思議に思うくらい運の強い犬だったんだ。

おじいちゃんは、20代の頃、道南（北海道の南地方）のある漁師町に住んでいたんだけど、その町の海岸沿いに白亜の断崖があったね。それはそれは美しい風景だったよ。

赴任の日、初めてその町の全景が見える高台にたどり着いた時、「オオー！」って思わず声が出たんだ。

「うわぁ、すごい！」って言ったきり次の言葉が出なかったほどだったよ。

急いで車を止めて高台からその光景を眺めたんだ。天気の良い日だったからその風景がいつそうすばらしく見えたんだ。

真っ青な空と海、そして海岸線。そこにどっしりと白い岩肌の断崖があって、手前に町の全景が見えるんだ。すばらしい所に転勤してきたんだなって感激したんだ。

白亜の断崖は、海底で長い時間かかって堆積した地層が、地殻変動で地上に現れたものなんだ。白い地層が何層にもなっていて、とっても美しいものだから「日本のグランドキャニオン」って言う人

がいるくらいなんだよ。

ある日の夕方。

おじいちゃんは、壊れた乳母車に子犬を一匹乗せている男の子に会ったんだ。数人の仲間連れでね。

おじいちゃんがその町に住んでしばらくたってからの頃だったんだ。

乳母車を押している男の子は、名前を海平（かいへい）と言ってね、おじいちゃんの家に向かいに住んでいる子だったんだ。たしか5歳くらいの子だったね。

来年、小学校に入学するとか言っていたからね。

それで、海平に聞いたんだ。

「子犬、どうしたの？」

すると「拾ってきた。お母さんに飼ってもらうんだ。」と言ったんだ。

その時、海平と一緒にいた他の子たちが、次々と子犬について話してくれたんだ。

「この子犬、足を怪我しているんだ。」

「どうして？」

「トラックにひかれたの。」

「ええ！それは大変だね。でも命は助かつ たんだね。」

「母犬ともう一匹の子犬は死んだ。」

「へー、それはいつの話？」

「昨日。」

「どこで？」

「中学校の横で。」

「死んだ犬はどうしたの？」

「運転手さんが海岸に捨てた。」

「へーそうなんだ。」

そんなやりとりをして子ども達と別れたんだ。

その翌日、おじいちゃんの職場で犬の親子がトラックにひかれたことが話題になったんだよ。

というのは、職場には犬の交通事故を見た人がいたからなんだけどね。

それで、その人の話から事故の様子がわかったんだ。

おじいちゃんが子ども達に会った日の前日、のら犬の親子が交通事故に遭ってね。子犬が二匹、母犬と一緒に車にひかれたんだって。中型のトラックだったそうさ。

事故にあった時、母犬と子犬1匹が即死に近い状態で、ほどなく死んだんだけどね、もう一匹の子犬はききやんきやん鳴きながら一点を中心にクルクル回っていたそうなんだ。足をケガしているようだ

ったんだけど、他にも打撲があつて苦しんでいる風にも思われて、この子犬も結局死んでしまうだろうって集まった人達で話していたんだって。

その時、トラックの運転手さんがね、「これもダメだなあ」って言つて、3匹とも海岸にあつた漂流物を集める場所に捨てることにしたんだって。

そんな残酷な話あるかつて思うかも知れないけどね。運転手さんにしてみれば、きゃんきゃん鳴いている犬もすぐに死ぬと思つたんだね。それに、死んだ犬や死にかけている犬をそのまま道路に置いておくことも出来ないしね。それで、後始末をしなければと思つて近くの海岸のその場所まで運んだらしいんだよ。

まあ、別な扱いもあつたと思うけれどね。当時はそんな扱いがそれほど不思議なことではなかつたんだよ。

運転手さんは、すでに死んだ犬とまだ生きている犬とを一緒にしてその場所に捨ててきてしまつたんだ。かわいそうな話だけどね。

ところが、犬が捨てられてしばらくして近所の子ども達が、その子犬が気になってきてね。それで様子を見に海岸に行くことにしたんだ。

海岸に着くと漂流物の近くで子犬の鳴き声がするのですぐ見つけることが出来たんだ。だけどね、その子犬をこのままほつておいて良いかどうか話し合つたんだって。結局、かわいそうだから誰かの

家で飼ってもらおうということになってね、代わる代わる抱きながら住宅街まで連れて来たらいいんだよ。

しかし、どの子の家でも子犬を飼ってよいという家がなくてね、どうしたらいいのか、困ってしまってたね。子犬を抱きながら街中を歩いていったんだってさ。そのうち、段々、日が暮れてきてね。

そんな時、たまたま、どこかのおじさんが通りかかってね、声をかけてくれたんだってさ。

その人はおじいちゃんと同じ職場の人でね、たまたま、犬の親子が車にひかれたのを見ていた人だったから、事情をよく知っていたのさ。

「やられたのは足だけだったんだね。」

そう言ってね、子ども達からその後のことをいろいろ聞いたんだそうさ。そして、しばらく考えてから言ったんだって。

「よし、わかったよ。おじさんが今晚この犬を預かるからね。そして、明日、役場に連れて行ってやるからね。」と言ったんだって。

役場に連れて行くということは、「子犬を殺す」ということなんだけどね、飼い主が見つからなければ、それは仕方がないことなんだよ。餓死させては、なおかわいそうだし、野良犬になったら人をおんだりいろいろな迷惑をかけるからね。

子ども達もそうしたこと、一応理解できていたので、子犬をおじさんに預けたんだそうさ。

そのおじさんの家では、すでに別の犬を飼っていたので新たに犬を飼うつもりはなかったんだね。しかし、行きがかり上、ひと晩、預かることにしたんだ。

おじさんは、子犬を連れ帰ると自分の犬を玄関の中に入れて、その子犬を外の犬小屋に入れたんだって。突然、母親を失った子犬だからひと晩じゅう泣かれても困るし、それに足も痛めているからね。わらも一緒に入れてやったと言っていたよ。

とにかく、そんな風にしてひと晩、子犬を預かったんだ。ところがね、次の朝、おじさんが犬小屋を見たら、子犬はいつの間にか、いなくなっていたんだってさ。

子犬がいつ犬小屋から抜け出してどこに行ったのか、結局、わからなかったんだ。

「役場に連れて行かれるのがイヤで逃げたんだな。」って、そのおじさんは笑いながら、職場の人たちに言っていたんだ。

「それにしても、あの子犬はどうなったんだらうね」って、今度は真面目な顔で言ったんだ。

「ウチの向かいの家で飼うことになったらいいよ。」って教えてやったら「それはよかった。安心しました。」

そのおじさんはホッとした様子でそう言ったんだ。

「それにしてもあの子犬、犬小屋を出た後、どこをどう動いて子ども達に拾われたんだらうね。」って誰かが言ったけど、それは誰

にもわからないことだったんだ。

乳母車を押していた海平たちと会ったのは夕方だったし、子犬がいなくなったのは朝だしね。そのあいだ、どう動き回ったのかわからないけど、とにかく、海平の家で飼われることになったのさ。

海平の家にはお父さんとお母さんの他に妹が二人いたんだ。

子犬はその家の玄関につながれていて、みんなでもよく世話をしていたから、犬好きの家族のように思っていたんだ。

ところがその後、しばらくして、海平のお母さんから聞いたんだけどね、本当は夫婦そろって、犬が嫌いだったんだってさ。

だけど、海平が「飼って！飼って！」と言い出して「世話も自分でするから。」とか何とか言ったものだから、結局、しぶしぶ飼うことにしたんだって。

それに犬を飼えば、子ども達が動物好きになるかも知れないと思って飼うことにしたのだとも言っていたよ。

子犬は左の後ろ足を全く使えずに引きずって歩いていたので、かなりの重傷だったと思うけれど、足以外は無事だったんだね。

しばらくして、その犬が「チルチル」と名付けられたことを知って、おじいちゃんは海平に聞いたんだ。

「チルチルって名前、良い名前だね。誰がつけたの？」

「お父さん」

「へエー、そうなんだ。どうしてチルチルってつけたのかな？」

そうしたら海平が言ったんだ。

「あの子犬はね、3回も命拾いをしているからとっても幸運な犬なんだって。」

「ああ、そうだね。3回も助かったんだよね。・・・それでチルチルなのか・・・なるほどね。」

「うん、それにね、危険な目に遭いながら幸せを探しているみたいだって。だから名前をチルチルとつけたってお父さん、言っていた。」

「なるほどねえ。考えた名前だね・・・もし、ミスだったらミチルって言ったのかな？」

「知らない！」

おじいちゃんはね、その名前を聞いた時、なぜか、とてもうれしい気持ちになったんだ。

確かに子犬は、3回命拾いをしていたんだよ。

1回目は交通事故。運が悪かったら母犬と一緒に死んでいたかも知れないよね。チルチルだけが死んでも不思議でない状況だったんだからね。それが運良くチルチルだけが助かって、次は海岸に捨てられたことだよ。これだって、そこでそのまま死んでも不思議ではなかったんだからね。ところが、子ども達に助けられて2回目の命拾いをしたんだ。そして3回目は、おじいちゃんと同僚の家から逃げ出したことだよ。もし、そのまま犬小屋にいたら役場に連れ

て行かれてその日のうちに殺されていたはずだからね。

しかし、どこでどうなったのか、わからないけど、とにかくそこから逃げ出せたのだから。それで助かったんだ。チルチルはわずか1日半のうちに、3回も窮地を脱したことになるんだからね。言われてみれば、確かにチルチルは運の強い犬なんだね。

チルチルという名前はメーテルリンクが書いた「青い鳥」というお話に出てくる男の子の名前なんだ。この童話はチルチルとミチルの兄妹が幸福の青い鳥を捕まえるために、いろいろな国を旅するというお話なんだ。

犬の名前をそれからとったというから「へエー」って感心したんだよ。

おじいちゃんは仕事の行き帰りに、チルチルと毎日、顔を合わせていたんだけどね、海平のお父さんとは滅多に顔を合わすことはなくてね。仕事の時間帯が全然違っていたからね。それで犬談義をすることもなく時間だけが過ぎていった感じだったね。

ところが、チルチルが飼われてから1年ほどしてね、そう、海平が小学校1年の時だった。海平の家でチルチルを手放したいと言っているという話が伝わってきたんだ。なんでも新しい飼い主を捜しているとか。

そうしているうちに、海平のお父さんがおじいちゃんの所に直接

やって来てね、「チルチルを引き取って欲しい」って言うんだよ。

おじいちゃんは、その時、北海道犬を飼っていたしね。そんなに世話出来ないからと断ったんだ。

おじいちゃんは海平のお父さんに聞いたんだ。

「どうして手放すことにしたのですか？」って。

夫婦が犬嫌いだとは聞いていたけれど、とにかく、飼い始めて1年も経っているし愛情もわいているはずだと思ったからね。

「いやあー、恥ずかしい話です。途中で投げ出すことになって。

でも、そうしないとこれから先、大変になりそうなんですよ。子どもも要求に押されて簡単に飼ってしまつて、こんなことになって後悔していますよ。」

海平のお父さんは、そう言ったんだ。

お父さんの話をまとめて言えばね、犬を飼うことの大変さが色々あつたようなんだ。

特に、海平の家族の場合、犬嫌いということがあるからなおさらなんだけどね。

犬には毎日餌をやらなければならない。糞はするし小便もする。

その始末が大変だ。

そりや当然だよ。犬だって生き物なんだからね。

それに、毎日、散歩をさせなければならぬ。これが結構負担だ。初めのうちは海平がしていたけれど、最近は、サボることが多い。

狂犬病の注射もしなければならぬからお金もかかる。家の前を通る人にだれかれとなく吠える。おまけに夜中にも吠えるから近所迷惑だ・・・などと言ってたね。

確かに、チルチルはだれかれとなく通る人に吠えるんだよね。

おじいちゃんも毎日、仕事の行き帰り、よく吠えられたんだよ。

チルチルとおじいちゃんは仲良しだったから喜んで吠えているんだけどね。チルチルには、いわゆる「無駄吠え」が多かったのかな。

海平のお父さんは、子どもに言われるまま、飼ってはみたもの予想していなかったことが次から次へと出てきたと言うんだ。そして、さらに大きな問題だと言ったのが、家族が犬を怖がるようになってきたということだったのさ。それも、海平のお父さんまでがそうだと言うんだ。

まず、下の妹二人が、チルチルを怖がるようになって玄関の出入りの際に、いちいち、チルチルをおさえていなければならなくなってしまうらしいんだ。喜んで吠えたり飛びついているだけなんだけどね。

それから海平のお母さんが餌をやるとき餌箱を移動させたら「ウーッ」って唸ったとか。

また、海平のお父さんまで怖く感じるがあったと言うのだ。

「私一人で里山を散歩をさせた時があったのですが、その時、綱を離して自由に走らせたところ、一直線に私の方に向かってくるチ

ルチルが急に怖く感じられましてね。散歩も少し消極的になってしまいました。海平だけですわね、怖がらずに付き合っているのは。」

チルチルが海平のお父さんに向かって走ったのは、喜んでのこと  
で、決して攻撃的ではなかったはずなんだけどね。

だけど、犬嫌いな人は別な感じ方をするんだね。そんなことで、さすがの海平のお父さんも困ってしまったってね。犬を飼い続けられない  
って思ってしまったらしいんだよ。

しかも、近所の犬好きの人がチルチルの足の太さを見て「この犬  
は大きくなるぞ。」って言ったものだから、「これ以上、大きくな  
られたら困るなあ。」って思っただってさ。海平のお父さんもお  
母さんも、それですます、手放す気になったと言うんだ。

海平のお父さんは、職場の人や知人に引き取ってもらえないか、  
いろいろ働きかけたらしいんだ。しかし、誰もチルチルを欲しがら  
なかったそうなんだ。何人かは、チルチルを見に来た人もいたんだ  
けど、足を引きずって歩くのを見て「これならいらぬ。」って断  
られたんだってさ。それで山に捨ててこようかとも思っただけだ  
だけどね、それでは、あまりにもチルチルが、かわいそうだし、無  
責任だしのら犬にでもなれば人にも迷惑をかけるからというので、  
それは取りやめにしたというのだ。

海平にはどんな風にしたのか知らないけれど、「チルチルを人  
にやることをわかってくれた。」とも言っていたよ。

それでおじいちゃんが言ったんだ。

「こういう場合は残酷だけれど、やっぱり役場に持って行って処分してもらうしかないですね。」って。

すると、海平のお父さんは、少し、首をかしげながら「そうですね。仕方ありませんね。・・・それにしても、子どもの言いなりに犬を飼ってしまうと後が大変ですね。」

海平のお父さんは、いかにも後悔している風に言ったんだ。

「子供は責任を持って世話をするわけではないし、結局は、親にツケが回ってきますから。とにかく近いうちにチルチルを役場に連れて行きますよ。子ども達のいないときにね。」

それから1週間くらいして、海平のお父さんはチルチルを役場に連れて行ったんだけど、その時の話も忘れられないね。

海平のお父さんが役場を訪れたとき、丁度、担当者が席を外していたんだって。それで別の係の人から処置する場所で待つように言われ、そこで待っていると、頭の上から女の人の声がしたんだって。見ると中年の女の人が、建物の二階からこっちを見て何かを言っていたんだって。

「その犬、殺すの？」と聞くから「そうだ」って答えると、「ちよっと待っててね。今、行くから。」と言ったんだって。

海平のお父さんが待っていたその場所というのは、丁度、町の商

工会議所の向かい側にあつたんだ。

その時、たまたま、そのおばさんが二階の窓から外を見ていたら、犬を連れて海平のお父さんが目に入ったというわけだ。

おばさんは急いで階段を下りてきたらしく、少し、ハーハーしていたけどね、息を整えることもなくチルチルを見て、それから頭をなでながら言ったんだって。

「かわいい顔をしているね。」

そう言うってから

「この犬もらつていい？」って聞いたんだって。

「もちろんですよ。」

海平のお父さんは喜んでね、そう言ったんだってき。

「どうしても飼えなくなつてね。飼い主を捜していたんです

よ。」

「足を怪我しているんだね。」

「交通事故にあつてね。母犬は死んだんですが、これが生き残つてね。」

海平のお父さんはチルチルの強運に奇跡すら感じて不思議な気持ちになつたんだって。

これで4回も命拾いをしたことになつたんだからね。

言ってみればたつた今、絞首台から舞い戻つたようなものだからね。

もし、担当課の人が席を外していなかったら……。もし、おばさんが、偶然、窓から外を見なかったら……。

おじいちゃんはね、その時、偶然と運命の不思議さを感じてね。人間にも時々、似たようなことがあるなあーって思ったんだよ。

チルチルは、このあとすぐにその女の人に引き取られて行ったというわけさ。

この話を聞いたとき、おじいちゃんは、昭和29年、台風で沈んだ洞爺丸転覆事故のことを思い出したんだよ。

あのとときも、船が出航する直前に乗船した人と下船した人がいたんだからね。そんな話は、大惨事の時に、必ず出てくる話だけどね。

人にも奇跡のような「運・不運」というのがあるんだよね。

チルチルを引き取った女の人の家は、海平の家から自転車で15分くらいの所にあつたんだ。

次の日、海平はチルチルに会いに行ったんだ。

チルチルの犬小屋は、その女の人の家から少し離れた畑の横にぽつんと置かれていて、そこにつながれていたんだ。

チルチルは海平を見ると大喜びでね。吠えながら何度も立ち上がって、ちぎれんばかりにしっぽを振ったんだって。

海平はそんなチルチルを見た時、とつても悲しかったんだってね。

「チルチル、ごめんね」

海平はチルチルの頭をなでながら、何度も何度も、そう言ったんだって。

それから、海平は、毎日、毎日、チルチルに会いに行ったんだってさ。そしていつも「チルチル、ごめんね。」って言ったんだって。

そんなある日、海平がいつものように会いに行ったらね、チルチルがいなくなっていたんだって。見ると犬小屋もなくなっていてね、ただ、チルチルをつないでいた木の棒だけが残っていたんだって。

海平は急いで飼い主の家に行ったんだけど、家は空き家になっていてね、それで、隣の家の人に聞いたら、「家族は根室に引っ越した。」と言ったんだって。

チルチルを引き取ってくれた女の人のご主人が、転勤になってね、それで、根室に引っ越してしまったんだ。

海平は大急ぎで家に戻ってお母さんや妹たちにその事実を知らせただけどね、家に到着するまでの間、海平は自転車の上で泣いたんだって。涙をぼろぼろ流しながら走ったんだって。

妹たちは只「エーッ、本当？」と言っただけだったし、お母さんは「あら、ずいぶん遠くに行ったんだね。」と言って海平をチラッと見たけど、あとは何も言わなかったんだって。海平はかなりイライラしながら仕事で帰りの遅いお父さんを待っていたんだってさ。

そして、夜9時ごろになってやっと帰って来たお父さんを捕まえて言ったんだって。

「チルチルがいなくなったよ！ あの家の人、引越したんだ。

根室に行ったんだって。」

海平は早口にそう言ったんだ。

お父さんはびっくりした顔をしてね、そして、悲しそうな顔をしたらんだけって。

「ずいぶん遠くに行ってしまったんだなあ。」

お父さんが独り言のようにそう言ったんだって。

「根室ってどこにあるの？」

海平がそう聞くとお父さんは地図を持ってきて、海平に見せてやったらんだけって。

「本当に遠いんだね。北海道の端から端に行ったんだね。」

海平はそう言いながら、しばらく地図を眺めていたんだって。

「もう、会えないね。こんな遠いんだから。」

お父さんは海平の顔をちらっと見て、少し考えながら言ったんだって。

「そうだね。函館から690キロもあるからね。・・・それに、

根室は大きい地震のあった所なんだよ。」

海平は地震に驚いて右往左往するチルチルを想像して急に心配になっってきた『チルチル大丈夫かな？』って、言ったんだって。

その時、お父さんは、静かに、ゆっくり、落ち着いた声で言ったんだって。

「大丈夫だよ。どんな大地震や大災害が起こったって。チルチルは強い運を持って生まれて来ているんだから。必ず奇跡が起こって死んだりはしないよ。心配ないよ。」

その時、海平は「僕もそう思うよ。」って答えたんだって。